

Costume : the journal of the Costume Society (コスチューム)

London : Society c/o Dept. of Textiles , 1967—

コスチューム・ソサエティは、英米圏で最初に設立されたコスチューム研究の学会である。学会誌「コスチューム」は1967年秋に創刊され、2005年に39号に達している。学会初期の会長はナショナル・ポートレート・ギャラリー館長のロイ・ストロング (Roy Strong)、編集がアン・ソーンダズ (Dr. Ann Saunders 歴史学)、委員にはジャンネット・アーノルド (Janet Arnold 服装史研究家)、 دونالد・キング (Donald King ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館テキスタイル部門)、アン・バック (Anne Buck ギャラリー・オブ・イングリッシュ・コスチューム)、マドレーヌ・ギンズバーグ (Madeleine Ginsburg ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館テキスタイル/ドレス部門)、ジェームズ・レーバー (James Laver 元ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館プリント/絵画部門)らの名がある。ミュージアム関係者が多いことからわかるように、コスチュームの収集・保存・鑑定などの情報交換や勉強会を持つために、イギリス国内のキュレーターやキーパーが参加して1965年にこの学会が設立された。最初の事務局はヴィクトリア・アンド・アルバート美術館のテキスタイル部門に置かれた。「コスチューム」の第1号から7号までが、既存のテキスタイル・ソサエティから発行されたことが当初の状況を語っている。コスチューム・ソサエティが発行元となるのは8号 (1974年) からである。

学会誌にはエッセーから論文まで掲載されていて研究レベルはさまざまだが、コレクションされている歴史衣装や絵画・イラストレーション・写真といったビジュアル資料が用いられているところがコスチューム研究の楽しいところでもあり、学究的な堅苦しさが少ないので読みやすいものが多い。キュレーターばかりでなくコレクターや教師、舞台衣装家やデザイナー、ライターやフリーの研究家なども投稿しており、テーマは多様だがやはりイギリス的な歴史視点からイギリスの服装を取り上げたものが多い。

学会員のなかでも歴史を重視した手堅い研究を続けてきているのが、コートールド・インスティテュート・オブ・アート (Courtauld Institute of Art) の服装史コース (History of Dress Department) でマスターを修了した研究者たちである。このアカデミックな服装史研究のコースがロンドン大学のコートールド・インスティテュートに設置されたのが1965年であり、初代のコース指導者がニュートン (Stella Mary Newton) だった。服装史コースが生まれたのはニュートンの業績が評価されたからである。彼女がナショナル・ギャラリーで仕事をしていた時期に、絵画に描かれた衣装から作品が制作された年代を推定できることを証明し、服装史研究がアカデミックであることが公認されたのである。「コスチューム」の17号 (1983年) には1967年から1982年までの間の服装史コース修了者が紹介されており、同コースを1971年に修了したリベイロ (Aileen Ribeiro) によるマスター論文のコメントが載っている。「コスチューム」21号 (1987年) はニュートンの指導を受けたコース修了者らの投稿論文を掲載して彼女の功績を称えている。リベイロはニュートンのあとを継いで1973年からコース主任となり、この分野ではじめて博士号を取得、現在も指導を続けて研究者を送り出し

ている。リベイロの博士論文「イギリスの仮装衣装（1730—1790年）と肖像画の関係」（1984年）は肖像画の読み方の難しさと面白さを実感させてくれただけでなく、アカデミックな服装史研究の方法を明確に示したことに意義があった。

コートールド・インスティテュートの研究方法は、収集品のコスチュームについて構造や形やディテールを説明することに終始する従来のキュレーターの論文構成に影響を与えることになった。史料を読み解く歴史研究の方法を加えることによって、収集品主体の研究に深みを持たせようという動きだった。キュレーターの仕事を経て服装史研究にも業績を残した研究家に、コスチューム・ソサエティの設立メンバーで学会長も務めたアン・バックがいる。彼女はマンチェスターにあるギャラリー・オブ・イングリッシュ・コスチュームのキュレーター兼キーパーとしてコレクションの整理・展示に追われる日々を過ごし、ローカルなアートギャラリーを国際的にも認知された充実したコスチューム・ミュージアムに育て上げ、その後は優れた著書も残してきた。コスチュームの保存・修復や展示が学歴のない「女の手仕事」と見られていた時代を経て、今は研究者としての道が開かれているのも彼女の指導や業績によるところが大きい。14号（1980年）にアン・バックの業績を紹介する報告がある。「コスチューム」のバックナンバーを通して、キュレーターの役割の変化や女性の研究者の足跡、そして服装史研究の方法の推移をたどることができる。

書評欄は、初期はタラント（Naomi A.E.Tarrant）とボード（Penelope Byrde）、1980年代からはタラントとスノードン（James Snowden）が担当している。タラントは国立スコットランド美術館のテキスタイル/コスチューム部門のキュレーター、ボードはコスチューム・インスティテュートを修了し、バースのコスチューム・ミュージアム（Museum of Costume Research Center, Bath）に所属していた。スノードンはヨーロッパ民族服研究で知られる学者でもありコスチューム・ソサエティ学会長も務めた。研究者や研究テーマを知るためにも新刊書や論文の評論と紹介は「コスチューム」誌の重要な部分になる。

服装史研究の分野で参考になった論文や史料は数多い。現在も基本的にコレクション資料が研究対象になっているが、そこから意外なことが見えてくる論文には興味がわく。今後はイギリス国内だけでなく植民地時代の植民地政策のなかで土着の服装や風俗をどのように把握し規制していったのか、宣教師らがもたらした影響なども視野に入れた論文が増えてほしいと願っている。多文化時代に要求される服装史研究のテーマだと思われる。（辻 ますみ）